

なぜ、このような会を企画したか 立花隆

天皇と東大と天皇機関説と

直接のきっかけは、昨年八月、「文芸春秋」に七年間にわたって連載してきた「私の東大論」を完結したことである。この連載は、昨年暮、「天皇と東大―大日本帝国の生と死」（文芸春秋）と改題して出版したことでわかるように、「東大論」というよりは、日本の近現代史そのもの（幕末明治維新から、一九四五年八月十五日まで）を、東大という「のぞき窓」を通して描く歴史物語となった。

なぜ、それが「天皇と東大」というタイトルに変わったのかというと、幕末から一九四五年にかけて、〈天皇という存在〉と〈国民の側の天皇観〉こそが、日本の近現代史を貫いてそのときどきの社会を大きく動かしてきた「影の主人公」であることがわかったからである。

そして、天皇観をめぐる最も大きなドラマの中心舞台が東大だったからである。

ドラマの中で最も大きかったものは、昭和十年（一九三五）の「天皇機関説問題」である。

「天皇機関説問題」と、それに引き続いている「国体明徴運動」は、一種の無血クーデターとして機能したといわれるほど、当時の日本の社会のあり方を根底的に変えてしまった。

そのような状況下で翌昭和十一年（一九三六）の二・二六事件、昭和十二年（一九三七）の盧溝橋事件（日中戦争開始）と、歴史はとどめることのできない暴走過程に入っていた。

わたしがそもそもなぜこれほど長大な物語（「天皇と東大」）を書くことになったのか、その大きな動機を自らに問うてみると、日本がなぜあれほどバカげた戦争に突入してしまったのか、その理由を知りたいということにつきる。直接の戦争行為突入の理由を知りたいということではない。その背景にあったはずの、もっと大きな国民感情の大きなうねりのようなものの転回点と、その裏側の事情・ならびに大転回のプロセスを知りたいということである。

長い話を短くすれば、「天皇と東大」を書くうちに、それが見えてきたとわたしは思った。そしてわかったことは、「天皇機関説問題」こそ、その最大のターニングポイントだったということである。

第一次天皇機関説論争（一九二二）では、天皇機関説が、それまで主流だった「天皇主権説」を圧して、国家公認の学説となった。同説を唱えた美濃部達吉は、天皇主権説を唱える上杉慎吉の憲法講座に抗して、東大法学部で第二憲法講座を開き、文官高等試験の試験委員にまでなった。

ところが、それから十年余りして貴族院を中心に急にもち上がった天皇機関説問題では、美濃部は反国体思想の元凶とされ、学匪と罵られることになった。その著書は発禁になり、すべての大学の講座から天皇機関説は追放された。美濃部は貴族院議員の座も辞さざるをえなくなった。そしてついには右翼テロリストの凶弾を浴びるにいたった。

そのような大変化が、わずか一年の間に起ったのである。それからは世をあげての天皇機関説排撃＝国体明徴運動に、官民ともに邁進していき、「国体を破壊する逆賊は殺して当然」というテロの時代が訪れることになる。

そのあたりを詳細に書いていくうちに、世の中が変わるときは、どれほど短い期間に、どれほど鋭角的に変わってしまうものかを知って、空恐ろしくなった。

そのときと同じとは言わないが、似たような国民感情の大転回が、もしかしたらいま現在の日本にも起きつつあるのではないか、という危惧心が、このたびの会を企画したもう一つの心理的背景である。

昨年亡くなった後藤田正晴前官房長官が、亡くなる直前、いまの社会のあまりにも急激な変化は、昭和六年の満州事変直後のころの急激な変化とあまりにも似通っていて気味が悪いといっていたことが思いだされる。

「東大の八月十五日」

ここで当日のプログラムの全体像を解説しておく。会は、第一部と第二部に分かれ、第一部は「東大の一九四五年八月十五日」に焦点をあてて、歴史の生き証人たちにリアルな歴史を語ってもらおうとしている。

第二部は、さまざまの演者によって、南原総長の歴史的意義と現代的意義について語ってもらおうとしている。まず、なぜ「東大の八月十五日」に焦点をあてたかを語っておく。

昨年はじめ、七年間にわたる連載をどのような形で終りにもっていくか悩んでいたときに、たまたま読んだのが、世界的免疫学者として著名な石坂公成・元ジョンズホプキンス大学教授が日経新聞に連載していた「私の履歴書」である。

その中で、終戦時医学部の学生であった石坂氏が、八月十五日に安田講堂に集められ、終戦の玉音放送をそこで聞かされたことを書いていた。

その頃石坂氏は、間もなく一億玉碎の本土決戦が開始されるものと信じ、そこで死ぬことを覚悟していた。だから自分の余命はぜいぜいあと二、三カ月だろうと思っていた。

それが突然の終戦を告げられ、茫然自失となったという。

安田講堂に集められた学生、教職員の一部は、さまざまのルートからこの日終戦の詔勅が下ることを事前に知っていたようである。しかし、大半は寝耳に水で、これを聞いて茫然自失となったのである。

これを読んだとき、「私の東大論」の終り方がパツとひらめいた。一九四五年八月十五日の東大安田講堂こそ、この長い連載を終りにするのに最もふさわしい舞台だと思ったのである。

東大は、戦前期の日本国の中核的担い手を育てるための高等教育機関であったから、軍人をのぞくと、あの戦争の各方面での中心的担い手たちの多くも東大が育成していた。

だから各方面の情報チャンネルを通して、終戦を事前に知る人々がある程度いたのである。東大の学生ならびに教職員たちは、八月十五日に必ずしもキャンパスにいたわけではない。全国のあちこちに散在して、それぞれ独特の終戦の迎え方をしていた。

詳しくは、配布資料の「八月十五日の東大」を開いていただくとわかるが、八月十五日の迎え方は実にさまざまであり、その日、本郷キャンパスにいた者はむしろ少数者であったといつてよい。

宮城クーデター未遂事件／日銀総裁の密命

広く「八月十五日の東大」を考えると、実はこの配布資料以上に、もっともと驚くほどのバラエティに富んでいて、その全貌を描いたら日本の縮図そのままになるくらいである。

なにしろ八月十五日早朝に、宮城で、終戦の詔勅の録音盤を奪おうとして決起した参謀本部の若手将校たちは、戦争中、玉碎の思想を最も激しく鼓吹した皇国史観のイデオログ、平泉澄・国史学科教授の門下生たちだった（終戦時陸相の阿南惟幾も平泉の門下生だった）。

八月十五日、平泉門下生たちのクーデターの試みは失敗し、多くは切腹して果てた。平泉自身は、その二日後、終戦後初の教授会で辞表を提出すると、そのまま福井県の故郷に帰った。

また中には、大内兵衛元東大経済学部教授のように、東大を人民戦線事件に連座して追われながら、終戦時、日銀総裁渋沢敬三から特別の密命を受けて、戦争が終つたらすぐに日本を襲うであろう大インフレにいかに対処すべきかの研究をしていた人もいた。そのため大内は、日銀の理事室で、総裁といつしよに終戦の詔勅を聞くという希有の体験をしている。

ちなみにこのとき大内は、もうひとつ別の密命も受けていた。

戦争が終れば、当然に国際通貨体制の再構築が行われるだろうが、日本はその体制から外されること確実である。しかし、いつになるかわからぬが、いずれ国際通貨体制の中に復帰して通商貿易につとめなければ、日本は経済的に生きていけない。将来どのような条件をどうクリアして、どのように国際通貨体制に復帰していくか、その戦略を練るという仕事である。

実際すでに一九四四年からブレトンウッズで米英中心の国際通貨会議がはじまっていた。やがてすぐにブレトンウッズ体制（IMF体制）ができあがっていったが、日本は予想した通りその体制から外されていた。日本が国際通貨体制に復帰（IMF加入）するのは、それから七年後の一九五二年になってからだった。

八月十五日、大日本帝国が減びるとともに、大日本帝国を人材供給の側面から、政治、行政、司法、技術、学術などあらゆる側面にわたって支えてきた帝国大学（東京帝国大学の正門にはいつも大きな菊の御紋章がかかげられてい

た)もまた滅んだ。

東大には、その滅びの過程で、滅びの過程を加速化することにつとめていた人々もいれば、逆に滅びの過程で国家としてのサイバールの仕方を懸命に考えていた人々もいたということである。

「国家の死と再生のドラマ」

「私の東大論」の連載を一九四五年八月十五日で終りにする方向でさらに取材を進め、資料の読み込みを進めていくうちに、そこで日本の歴史は終わったわけではないということに気がつかされた。

大日本帝国はそこで終わっても、その焼け跡の中から、すぐに新生民主主義国家日本が立ち上がっていったし、東京帝国大学が滅んでも、新制東京大学がすぐに立ち上がっていた。

八月十五日の大日本帝国と帝国大学の「死のドラマ」は、実は新生国家日本と新制大学の「誕生のドラマ」でもあった。両者は短い移行期を経て連続継続している一つのドラマだった。

その過渡期的性格に目をあてるなら、八月十五日は「国家の死」のドラマであったというより、「国家の死と再生」のドラマであったというほうが正しい。

そういう視点から歴史を見直したときに、国家と大学の再生のドラマの主人公として、またそのドラマの大いなる演出家として浮かびあがってきたのは、旧制東大最後の総長であり、新制東大最初の総長であった南原繁の姿だった。南原は戦争が終った直後から、茫然自失状態の国民に対して、新聞等への執筆や、一連の公的会合での演述を通して、我々はいまどのような歴史の流れの中にあり、これから何をなすべきかを訴えつづけた。

南原の演述は、さまざまな機会（国民の祝日、大学の記念日など）をとらえて、安田講堂で学生・教職員向けになされたが、それはなされるたびに新聞でその内容が大きく報じられ、国民に強い感銘を与えた。

「天皇と東大」の第六十五章「南原繁総長と昭和天皇退位論」（配布資料）は、これらの演述を大量に引用しながら書いた文章だが、南原の言葉引用しつつ、わたしは、南原の言葉に深い感銘を受けていた（わたしだけでなく、「天皇と東大」の読者の多くがそういう感想をもらしている）。

わたしは少し年代が若いので、南原の警咳に接したことがない世代に属する。しかし、それらの演述の記録を読むだけで、なるほどこの人あったればこそ、戦後の日本は、敗戦でへたってもへたりにきることなく、精神的に復興を上げることができたのだと思つた。

「最悪の日」を「希望に満ちた日に」

一連の南原の演述を一言で総括するなら、それは、敗戦によって精神的ドン底状態にあった日本国民に対して、ちよつと見方を変えれば、ドン底が決してドン底ではないということを教えるものだった。

南原繁は逆に、歴史上この敗戦は日本国民に与えられた最も大きなチャンスとみなすことができるかと教えていた。

戦後最初の一年の演述を集めて翌年早々に発刊された「祖国を興すもの」の序文（配布資料）で、南原は次のように述べている。

「一九四五年八月十五日―まこと断腸の思いをもってその日を迎えたわれわれ国民にとって、それは永久に忘れてはならぬわが国の歴史における最悪の日、禍いの日であった。しかし顧みて、それは同時に、わが民族の新生、大いなる未知への出発の日でもあった（一部文章整理）」

南原がここでいわんとしていたことは、われわれが、どのような未来を構築していくかによって、「最悪の日」すら「最も希望に満ちた日」に打ち変えることができるということだった。

この時代の演述で最も有名なものは、敗戦の翌年一九四六年二月十一日の紀元節の日に行った「新日本文化の創造」と題する演述だった（以下の引用はこの演述から）。

この年は、占領がはじまったばかりの年で、日本国の手元には占領軍の管理下にあり、誰も紀元節などというものは祝おうとしない時期だった。

ところが南原は、正門に堂々と日の丸を掲げさせ、紀元節の祝典を型どおり安田講堂においてとり行った。そこでなしたのが先の演述である。

南原はまず、新しい紀元節の日が、これまでの紀元節の日とは全くちがう意味を持っていることを強調して、次にように述べた。

これまでの紀元節は、神話と伝説の上に立てられたもので、そのような精神のあり方が、日本国をこの戦争に導き、国家を破綻させる結果となった。

「かえりみれば、満州事変以後、軍国主義者と国家至上主義者らの政治支配が台頭して以来、ことさらに民族の神話伝統を濫用し、曲解し、自己の民族の優越性を誇称し、東亜とひいて世界を支配すべき運命を有するかのごとく喧伝し来たったのである。それは内に対する欺瞞と外に対する恫喝でなければ、一種の選民思想的独断と誇大妄想以外のものではない。かようにして中日事変は起こり、太平洋戦争は開始せられ、そして遂に現在の破局と崩壊に導かれたのである」

しかし、その戦争が終り、つい一カ月前（四六年一月）には、そのような日本神話の中核にある、民族神の末裔にして現人神たる天皇が、自己の神格を自ら否定するという驚天動地の「人間宣言」が発された。

「神様天皇」から「人間天皇」へ

南原はこの「人間宣言」を大きく評価して、次のように述べた。

「本年初頭の詔書はすこぶる重大な歴史的意義をもつものといわなければならぬ。すなわち、天皇は『現人神』としての神格を自ら否定せられ、天皇と国民との結合の紐帯はいまや一に人間としての相互の信頼と愛敬である。これは日本神学と神道的教義からの天皇御自身の解放、その人間性の独立の宣言である」

ここで南原がいわんとしていたことは、こういうことだ。

「人間天皇」も、これまでは「現人神天皇」というコンセプトに束縛され、「神様天皇」を演じてこななければならなかった。天皇自身が「人間天皇」を宣言することによって、その束縛を脱し、人間でありつづけることができるようになった。それによって天皇ご自身が、真に人間性を回復することができたのではないか、こういうことである。

この時期、天皇の人間宣言以外にも、占領軍の主導の下、一連の社会革命、文化革命が急速に進んでいた。

これを南原は、明治維新以上の国家の大革命ととらえ、昭和維新と名づけていた（昭和戦前期の右翼国家革新運動も昭和維新をスローガンにしていたが、もちろん、そのような主張とは関係がない昭和維新である）。

南原は、天皇の人間宣言を、昭和維新の精神革命面のさきがけととらえていた。

「身みずから衆に先んじて昭和維新の精神革命の範となり給うた皇室を戴き、古き伝統に新しき精神を接木して、わが民族の其の永遠性と世界における神的使命を見出し、一致団結して新たな『国生み』に向って、堅き決心をもって邁進しようではないか」

少々わかりにくい文章だが、天皇の人間宣言は、昭和維新の精神革命の範となったというのである。

日本国民も、天皇に従って、精神革命を行えというのだ。そうすれば、日本は新しい国に生まれ変わる。それが新しい「国生み」になるといなのだ。

このくんだり若い人にはわかりにくいだろうが、紀元節とは「国生み」の神話の上に建てられた建国記念の日なのである。それを念頭に置くと、このくんだり、南原がいつていることは、皆で一致団結して新しい「国生み」を行い、新しい紀元節を作ろうということなのだ。

一挙に成った日本型宗教改革

なぜこの昭和維新革命をもって明治維新以上というかといえば、明治維新がもつばら、西欧近代国家に追いつき追いつくことを目標として、「一切の営みは挙げて国家権力の確立と膨張に向けられ、文化は国家のために手段視され来たった」が、昭和維新はそうではないからである。

国家権力中心の国造りが行われたため、戦前期の日本においては「熾烈な民族意識はあったが、おのおのが一個独立の人間としての人間意識の確立と人間性の発展がなかった」。その結果、「人間思惟の自由」も、それをもとに展開されるべき「政治的社会活動の自由」もなかった。そのため、「個人個人は国家的普遍と固有の国体觀念の枠にはめられ」てしまうような社会になってしまった。そのような社会にあつては、「個人良心の権利と自己判断の自由が著しく拘

束を受け」、その結果として、「国民は少数者流の虚偽の宣伝に欺かれ、その指導に盲従し来たった」。

ここに、日本が国をあげてあの無謀な戦争に突入し、国を亡ぼしてしまった根本原因があるというのが南原の認識だった。

西欧近代文明が、ルネッサンスと宗教改革の上に築かれた人間個人の尊厳の確立から出発したのに対して、ルネッサンスも宗教改革も持たなかった日本では、個人の精神が日本神学の枠内に閉じこめられ、その教義に束縛されてしまっていた。

その結果、国家主義と偏狭な国体思想が日本の社会全体をおおいつくし、自由な個人精神の存在を許さない典型的な全体主義国家ができあがってしまった。その転換期で起きたのが、先に述べた天皇機関説問題である。

しかし、いま進行しつつある昭和維新革命によって、全体主義の宗教部分であった「天皇中心の日本神学の束縛」から天皇自身が自己を解放する革命が起きた。

天皇の精神革命によって、国民の全てもまた日本神学の束縛から解放されるという宗教改革が一举に成った。

そしてそれは宗教改革にとどまらず、必然的に文化的大革命となった。日本人を縛っていた「国家と国体」という、個人よりはるか上位にあつて日本人全体を支配してきた、精神支配の枠組みがくずれたことで、日本的ルネッサンス（人間解放）がはじまったということである。

このような文化大革命によって、はじめて日本人は、日本の「民族宗教・民族文化によって閉じられた世界」から、「世界的普遍性が支配する世界文化の世界」に自己を解放していくことができた、ということである。

「それは同時に、わが国文化とわが国民の新たな『世界性』への解放と称し得るであろう。なぜならば、ここに初めて、わが国の文化がわれに特殊なる民族宗教的束縛を脱して、広く世界に理解せらるべき人文主義的普遍の基礎を確然と取得したのであり、国民は国民たると同時に世界市民として自らを形成し得る根拠を、ほかならぬ（「人間宣言」）詔書によって裏づけられた」ということなのだ。

日本人は、天皇の人間宣言によつてもたらされた、精神革命、文化革命によつて、世界文化の一翼をになうべき世界市民になったというのが、南原の基本的な認識だった。

「歴史は自らこれを創造しなければならぬ」

これが南原のいう「新たな国生み」であり、そこにこそ、紀元節をあらためて祝う必要があると考える根拠があつた。「日本はわが国固有の伝統と精神を賭けて戦つたところのこの戦争において、この精神自体が壊滅した今、何を以つて祖国の復興を企て得るであろうか。それはもはや過去の歴史において求め得ないとすれば、将来において作り出されねばならぬ。この意味において、わが国の歴史は過去において在るのではなく、まさに将来において在り、新たに自らこれを創造しなければならぬ。されば、今日は紀元二千幾百年であるよりは、今を以つて新たな紀元元年として出発すべきであると思ふ」

西暦一九四六年の紀元節は、日本紀元二六〇六年目の紀元節として祝うのではなく、新日本紀元元年として祝うのだ、ということである。日本の歴史は過去においてあるのではなく、未来においてあるのだ、これから我々自身が作つていく現実が日本の未来の歴史なのだというわけだ。この南原の発想は、敗戦ショックでへたりきっていた日本人をどれほど元気づけたらうか。

このように、視点を根本的に切り変えることで、人々の視点を過去から未来へ、過去の破壊から未来の建設に向けさせたことが、どれほど日本の復興に役立っただらうか。

南原はこう人々を叱咤激励した。

「諸君は眼を見開いて日本が今いかなる状態になつてゐるかを真に認識するならば、誰が痛苦と憤激を感じない者があろうか。もしわれわれにしてなお茫然自失、虚脱の状態にとどまるならば、われわれを待つものは奴隷の不幸と、ついに民族の滅亡である。これに反して、もし諸君にして覚醒し、希望と自信をもつて立ち向うならば、諸君の世代において世界の前に恥じなき国民が起り来たるのを目撃し得るであろう。少なくとも諸君の子孫にその完成の輝かしい事業を遺すことができるであろう。」

生か死か。永遠の屈辱か、それとも自由独立の回復か。われわれは現在その関頭に立っている。」

このような南原のよびかけに日本人の多くが応えて立ちあがったことで戦後日本の急速な復興がもたらされたのだといつてよいだろう。

だが南原は、この昭和維新革命には、精神革命がともなわなければならないといい、復興のためのエネルギーが向

かうべきベクトルは、偏狭な民族主義の方向であってはならず、「世界人類のため」という「世界普遍」をめざすものでなければならぬとして、こう述べていた。

「真の昭和維新の根本課題は、そうした日本精神そのものの革命、新たな国民精神の創造―それによるわが国民の性格転換であり、政治社会制度の変革にもまさって、内的な知的・宗教的なる精神革命であると思う。(略)身を鴻毛の軽きに比して国家のために戦い来たった同じ生命をば、いまや祖国を通して世界人類のために献げ得るであらう。」

このあたりまでを読んだときに、私は次の八月十五日(つまり二〇〇六年八月十五日)に、ぜひともこのような会を催したいと思ったのである。

あの八月十五日に安田講堂にいた人々の中の生存者を集め、あの南原総長時代を如実に知る者たちを集め、彼らの時代証言を聞くとともに、いまあらためて南原総長の言葉を読んだときに、何を考えるべきか、当代一流の知識人たちに語ってもらおうと思ったのである。

「世界の前に恥じなき国民」

あれから六十年を経て今年には南原流にかぞえれば、新日本紀元六十年である。

日本人は本当に旧い日本精神を捨てて、新たな国民精神を創造し得たのだろうか。

日本人は果していま本当に、世界市民となり、世界文化の担い手となっているだろうか。

人類文化と人類社会の平和のために身を献げているのだろうか。「世界の前に恥じなき国民」になっているだろうか。

国民のエネルギーが、再び偏狭な民族主義に向かってしまう恐れはないのか。